

日本のトップバスケットボールチームにおける情報分析活動の現状

The present conditions of the information analysis activity in the Japanese top basketball team

1K05B162

長田 真緒

指導教員

主査 倉石平先生

副査 磯繁雄先生

【緒言】

近年の社会的状況が情報化社会と言われるように、スポーツ界においても、スポーツの高度化、スポーツの競技力向上に伴い、情報の活用及び情報の高度化が必要不可欠になってきている。バスケットボール競技においても、世界と戦うためには情報分析活動が欠かせず、欧米をはじめとする各国のナショナルチームや大学チームでは、ゲーム分析ソフトを利用した情報分析活動を行っている。また、欧米では情報分析活動を専任で行う‘ビデオコーディネーター’という役割が、既に職種として認められている。バレーボール競技においても、日本を含む各国のチームが映像分析ソフトを利用し、国内では「アナリスト」の地位が確立されると共に、普及活動が実施されている。しかし、これらの欧米のバスケットボールチームや、国内の他競技に比べると、日本のトップバスケットボールチームでは、各チームのホームページを見る限り、情報分析活動を行う者は存在しておらず、情報分析活動について遅れをとっていると考えられる。そこで、本研究では、日本のトップバスケットボールチームにおける情報分析活動の現状を調査することを目的とした。

【方法】

日本バスケットボールリーグ(JBL)所属の8チーム、バスケットボール女子日本リーグ機構(WJBL)所属の7チーム、日本プロバスケットボールリーグ(bjリーグ)所属の5チームの計20チームを対象とし、全17問の質問紙調査を行った。調査期間は2008年10月下旬から11月上旬で、

各チームのヘッドコーチ、もしくはアシスタントコーチに対して質問紙を郵送した。有効回答数は14部(70%)であった。

【結果】

1. 情報分析活動をする人について

全14チームにおいて、情報分析活動を専任で行う人は存在しておらず、コーチやマネージャー、通訳らが、各々の仕事に加えて情報分析活動を行っていた。13チーム(92.9%)がチームの活動時間全てに帯同していると回答したが、時間の内訳として情報分析活動と他職にかける時間を比べると、他職にかける時間の方が多いチームが、回答を得た11チーム中8チーム(72.7%)であった。

2. 具体的な情報分析活動内容について

全14チームが自チームの試合及び他チーム同士(対戦相手)の試合における、各種情報分析活動を行っていた。映像分析の方法は、映像分析ソフトを利用しているチームが6チーム(42.9%)で、利用していないチームが8チーム(57.1%)であった。

3. 現在の情報分析活動に対する考えについて

現在の情報分析活動に対する満足度については5件法で回答を求め、「満足」が6チーム(42.9%)、「どちらとも言えない」が4チーム(28.6%)、「不満」が4チーム(28.6%)であった。情報分析活動の高度化については、「高度化させたい」と回答したチームが9チーム(64.3%)であり、専任の情報分析者の需要については、「ほしい」と回答したチームが8チーム(57.1%)であっ

た。

【考察・結論】

本研究によって、日本のトップバスケットボールチームには、専任の情報分析活者である「アナリスト」は存在しないことが明らかとなった。それとともに、日本のバスケットボール界に「アナリスト」の需要があることも明らかになった。各トップチームの財政面を考慮すると、専任の情報分析者を置く余裕はないのが現状である。情報分析活動を行うには、マンパワーと時間を要し、満足のいく情報分析活動を行うには、時間、マンパワー、ツ

ルの不足を補い、ツールを普及させる必要がある。情報の利用についてはコーチの考えが大きく影響するが、日本のトップバスケットボールチームの競技レベルを向上させ、世界と戦えるようになるためには、情報の利用、情報分析活動の高度化、「アナリスト」の存在が必要不可欠である。

今後は、日本のバスケットボール界に、「アナリスト」という存在を普及させるべく、「アナリスト」育成の場を設ける必要がある。また、「情報分析活動やアナリストの活躍が、チームの競技力向上に影響を与えた」という実績を増やしていく必要があると考える。